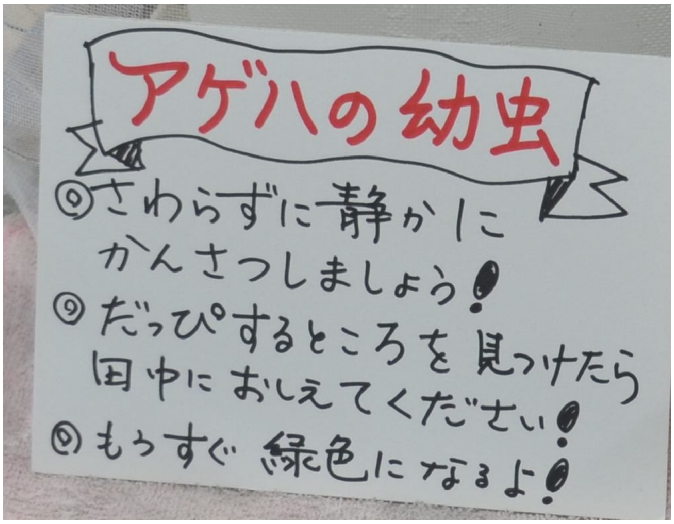
「日々の理科」（第 2528 号） 2021,-6,15

「アゲハの成長観察コーナー（３）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員
田中　千尋　Chihiro Tanaka

アサギマダラの幼虫は「一冬かけて」ゆっくり成長することが多いが、アゲハの幼虫の成長は非常にはやい。直径 2mm 足らずの小さな卵から生まれた「毛子」は、日に日にどんどん大きくなるのがわかる。「食べた重さ分、体重が増える」のではないかと思うほどだ。

最初は黒い幼虫で、子どもたち曰く「あまりかわいくない」それもそのはず、これは「鳥の糞」に擬態しているようなのだ。大きさも見た目も、確かにそのように見える。そもそも幼虫は、食べている時、移動する時以外は、ほぼじっとして動かない。天敵にはまさに鳥の糞に見えるのだろう。



アゲハ幼虫の変態の中でも、黒い幼虫が脱皮して、緑色になるのは、劇的な変身と言える。しかし、その一瞬はなかなか観察できない。およそ５分ほどで「脱皮作業」が終わってしまうのだ。しかし、写真のような掲示をしておくと、誰かが必ず気づく。この日もそうだった。

「先生、先生、田中先生（３回連呼が多い）、黒い幼虫がダッピして、緑色のヤツ（子どもはヤツという言い方が好き）が出てきてる！」

まさに子どもが告げに来た通りの状況だった。今まで黒かった幼虫の中から、緑色に大変身した幼虫が少しずつ出て来るのがわかる。幼虫がじっとしていて、皮のほうを後ろに押し出すというよりも、少し粘り気のある黒い皮の中から、「トンネルを抜けるように」這い出してくる、というのが正しい表現だ。

ちょうど中休みだったので、脱皮の一部始終を子どもたちと観察できた。脱皮直後の幼虫は黄土色っぽい緑色だったが、しばらく休むと、あざやかな黄緑色に変化した。これでようやくいかにもアゲハの幼虫らしい「ツラガマエ」になってきた。